

宇陀を駆けた人々

林 豹吉郎 篇 3

天誅組、逆賊から英雄へ

高取藩に敗れた天誅組は再び、天辻峠（五條市）まで退却しました。その後、各地で激しく抵抗しますが、圧倒的な幕府軍の勢力に戦況は、不利なものとなっていきました。

天誅組は、再起を誓いながら、やむなく十津川を脱出し、新宮から海路を長州に向かおうと南下しましたが、紀州勢にはばまれたために北上を続けました。そして文久3年（1863年）9月24日には、吉野の鷲家口（東吉野村）へと至ります。この時、鷲家口に彦根藩、鷲家に紀州藩が入り、要所を固めていました。ここで天誅組と幕府軍との激しい戦闘が繰り広げられ、天誅組は、鷲家口で壊滅してしまいました。ここで、宇陀出身の林豹吉郎も戦死してしまいました。この戦いによって、普段静かな山村は、たいへんな騒動になったのです。この戦いは、「天誅組の変」とも呼ばれています。

この年、天誅組は当時の体制に反逆する勢力となつてしまいましたが、時勢が変わり、明治維新後

は、天誅組に関する評価が変わってきます。天誅組の変は、明治維新（1868年）の5年前の出来事ですが、この行動が「明治維新の魁」と評価され、五條は明治維新発祥の地ともいわれています。

林豹吉郎は、明治41年（1908年）、明治政府から正五位という位階（功績のある人に与えられる位）を与えられ、大宇陀春日にある慶恩寺に顕彰碑が建てられました。その後、昭和7年（1932年）には、「天誅義士戦死70年」を記念して、誕生地の大宇陀拾生にも顕彰碑が建てられました。

豹吉郎は、今、東吉野村小川の明治谷墓地に眠っています。また、豹吉郎に関係する資料は、五條市文化博物館に所蔵されています。



文・柳澤一宏（文化財課）



「生きがい」って何でしょう？

「生きがい」という言葉をよく聞きます。人生を豊かに、いきいきと送るうえで大切なもののひとつではないでしょうか。

「生きがい」は、ものごとを達成したからここで終了という性質のものではありません。「生きがい」としては、自分の存在意義を感じたり、社会や人の役に立っていることで満足感や達成感を得られたりすることは、いわば「生きる原動力」と言えるでしょう。

趣味を楽しむ、ボランティア活動をする、仕事に集中するなど、人によって「生きがい」はさまざまです。わたしたちには、年齢や性別、立場や職業などに関わらず、自分の人生を豊かにするためのたくさんの選択肢が与えられています。

高齢者が長年の豊かな知識や経験を生かして社会参加をすることは、社会全体の成熟と活性化につながります。ま

た、核家族が増えている現代社会では、異世代間の交流を図る良い機会にもなります。世代の違う人どうしが触れ合うことによって、互いにないものを補い、あるものを共有することが出来ます。

誰かのために何かをして、他者の喜びを自分の喜びとできるような「生きがい」を見つけることができれば、この上なく幸せなこともありません。そのことで、人はもつと他者に優しく、温かくなれるのではないのでしょうか。「生きがい」から生まれる「やさしいまなざし」は、お互いの人権を大切にする社会をつくっていくためにも、必要なものであるといえるでしょう。

